

論文内容の要旨

報告番号	空欄	氏名	岸本 直子
Distinctive Rorschach profiles of young adults with schizophrenia and autism spectrum disorder			
(和訳) 青年期の統合失調症と自閉スペクトラム症のロールシャッハ・テスト反応の相違			

論文内容の要旨

統合失調症は幻聴、妄想などの陽性症状と無為、自閉といった陰性症状を主体とする思春期に好発する精神疾患である。一方、自閉スペクトラム症は社会的コミュニケーションや社会性、常同行為などによって特徴づけられる発達早期から認められる神経発達障害である。しかし、統合失調症と自閉スペクトラム症は知覚や情動、社会的認知などを含む臨床症状で類似している点も多い。そのため、自閉スペクトラム症の診断には幼少期の生育歴聴取が重要になるが、成人の場合には詳細な生育歴の聴取が困難であり、成人期の患者においては統合失調症と自閉スペクトラム症を正確に鑑別することは難しい。ロールシャッハ・テストは人格特性や情動機能について査定するために精神科臨床で広く用いられている投影法による心理検査の1つである。一般的には、精神病障害の無意識下での思考形式の異常の有無を調べるために用いられ、統合失調症と自閉スペクトラム症のロールシャッハ・テストの反応に相違があるかどうかを調べることは、両者の鑑別診断の補助となる可能性が考えられる。しかし、これまでに両疾患のロールシャッハ・テストの異同を直接比較した研究はなく、本研究では、統合失調症と自閉スペクトラム症のロールシャッハ・テスト反応の相違について検討した。

対象は、奈良県立医科大学附属病院精神科およびきょうこころのクリニックを受診し、本研究の参加に同意を得た平均 26.05 ± 4.73 歳の統合失調症群20名と、性別、知能指数を一致させた平均 26.20 ± 4.73 歳の自閉スペクトラム症群20名であった。診断はアメリカ精神医学会が提唱する診断基準であるDSM-IV-TRに従って行い、臨床症状の重症度、診断妥当性についてはPositive and Negative Syndrome ScaleやGlobal Assessment of Functioning、Autism-Spectrum Quotient Japaneseを用いた。そして、対象者全例に包括システムに準拠してロールシャッハ・テストを施行し、クラスター別にロールシャッハ変数の比較を行った。なお、本研究は奈良県立医科大学・医の倫理委員会の承認を得ている。

結果、統合失調症群は自閉スペクトラム症群と比較して、Dスコア、AdjD、DQo および FQ-が有意に高く、active および DQ+が有意に低かった。Dスコアおよび AdjD はストレスに関連しており、この値が低い場合にストレス耐性の低下が示唆される。DQo および DQ+は情報処理に関連しており、本結果から、自閉スペクトラム症と比べて統合失調症の方がより単純なものの見方をしやすい傾向があると考えられる。Activeは対人関係に関連する指標であるが、統合失調症群より自閉スペクトラム症群の方が他者に対して肯定的な関心を向けやすいものと考えられる。以上より、ロールシャッハ・テストが統合失調症と自閉スペクトラム症の鑑別診断の補助として有用な手段となる可能性が示唆された。